

# 花 き

## 実 況

### 1 キク

奥越での8月咲きギクは平年より早く7月下旬から8月上旬に咲き始め、8月の盆時期には出荷量が大幅に少なかった。価格は全般的に高く60～80円で推移した。病虫害では7月下旬からオオタバコガ、ハダニ類の発生が増加した。8月中下旬から褐斑・黒斑病が中発生であった。

9月咲きギクの草丈は、「山手白」が91cm、59枚、「夕映」が96cm、60枚、「シューフレンド」が84cm、48枚であった。オオタバコガの食害がみられ、8月下旬で二齢幼虫が多い。

また、JAキク部会は7月2、3日に日持ち認証の審査が行われた。その結果、7月8日付で生産者部門の認証に合格した。行事として、7月24、25日にキク部会10周年記念行事、イメージキャラクターの発表等が行われた。7月中旬に大野市、勝山市の福祉施設にキク切り花の贈呈が実施された。



図1 JAテラル越前キク部会イメージキャラクター「きくるん」



図2 認証マーク  
8月以降、出荷箱に印を押し出荷している



写真1 MPS協会による日持ち認証審査風景

坂井では7月～8月の高温乾燥により生育が悪く、草丈がやや低い傾向が見られたが、市況は60円前後と高かった。秋ギクは「小朝」が128cm、「初穂」が95cmで、8月下旬から9月上旬開花の見込。寒ギクは「雪まつり」等で15～20cm。病虫害では一部にハダニ類とアザミウマの食害が見られた。

福井の春植え8月咲きギクの草丈は、8月6日調査で福井北部の「花絵」が108cm(115cm)、蕾径6～10mm(6～10)、「小鈴」88(98)cm、「みのる」94(99)cmであった。福井市東郷地区の「小鈴」は8月6日調査で、87(102)cm、「恋心」は90(100)cmで出荷した(昨年8月12日調査)。病虫害では、全般的にハダニ類やアザミウマ類が少発生であった。福井の春植え8月咲きギクは、盆前のお荷が多く、全体的に1週間から10日程度開花が早くなった。

丹生の春植え8月咲きギクは、8月5日調査「小鈴」で切り花長85(87)cm、「シューペガサス」で切り花長88(90)cm、「うたげ」で切り花長84(92)cmであった。病虫害はアブラムシ類、アザミウマ類、白さび病が発生していた(昨年8月7日調査)。9月咲きギクの「ミスベティ」の草丈は8月18日調査で70(75)cm、蕾径2(2)mmである(昨年8月19日調査)。

南越の春植え露地ギクは8月5日調査で「翁丸」草丈80(88)cm、「小鈴」草丈83(92)cm、「はじめ」草丈85(96)cmであり、8月はじめで出荷終了(昨年8月5日)した。病虫害はダニ類、アザミウマ類が微発生であった。南越の春植え8月咲きギクは7月25日ぐらいから出荷が多くなった。

二州の8月咲き小ギクは、8月上旬で収穫を終了した。9月咲き小ギクの草丈は、8月20日調査（昨年8月20日調査）で「映紅」が草丈69.8cm（昨年61.2cm）、蕾径7.4mm、「しらさぎ」が草丈64.8cm（昨年73.8cm）、蕾径4.0mm、「わかさ」が草丈87.4cm（昨年96.4cm）、蕾径2.0mm（昨年5.4mm）であった。病害虫は、キクモンサビダニによる紋々病が少発である。10月咲き小ギクの生育は、「おりづる」が草丈47.2cm、「かおり」が62.0cmとなっている。

若狭の8月咲きギクは、8月上旬で収穫を終了した。9月咲き小ギクの草丈は、8月20日調査（昨年8月20日調査）で「楽園」が草丈98.6cm（昨年86.2cm）、蕾径（昨年2.6mm）、「みゆき」が草丈100.4cm（昨年83.6cm）、蕾径4.6mm（昨年4.8mm）、「みすず」が草丈88.0cm（昨年74.8cm）、蕾径5.8mm（昨年5.8mm）であった。病害虫は、ハスモンヨトウが微発、アザミウマ類が少発である。10月咲き施設栽培の小ギクは、「おりづる」が57.6cm、「かおり」が67.2cmとなっている。アザミウマ類が少発である。

## 2 ユリ

奥越のシンテッポウユリは、4月に定植した「オーガスタ」が大阪、金沢、福井へ出荷された。出荷の最盛期は旧盆となり、価格は福井で80~100円となり、草丈は120cmであった。坂井の「オーガスタ」は7月下旬から開花し、同じく80~100円であった。

嶺北地区「リリブライトレッド」の二度切り栽培を目的とした球根冷蔵は、8月下旬から坂井、福井の生産農家で実施予定。

## 3 スイセン

促成スイセンは、7月下旬から8月上旬に定植された。早い圃場では発根が始まった（8月20日調査）。また、露地圃場のスイセンは圃場によりバラツキはあるが発根が始まり、平年並みである。

## 4 ストック

坂井ではアイアンシリーズが主要な品種であり、直播が8月上中旬から開始された。品種は「チェリーアイアン」、「マリンアイアン」、「アプリコットアイアン」、「ホワイトアイアン」等であり、8月20日現在で双葉展開直後である。一部で高温による発芽不良が見られた。

福井ではカルテットシリーズが8月下旬から播種が開始され、9月上旬まで順次行われる。

南越ではカルテットシリーズが8月16日に直播された。ヨトウムシ類が少発生である。

若狭では、7月中旬に直播種したストック「アイアン」シリーズ、「カルテット」シリーズが草丈5cm程度になっている。

## 5 トルコギキョウ

奥越では2月に播種され、4月下旬に定植された「ロジーナグリーン」、「ロジーナブルー」、「ロジーナスノー」、「ロジーナⅢ型ピンク」が8月上旬に出荷された。価格は50円前後。

あわら市の抑制作型の定植は8月4日に行われ、10月上旬出荷予定で草丈15cm前後である。

越前市の8月5日調査では「アンジェリナブルーピコティ」、「ピンクピコティ」、「モレットマリン」（晩生品種）で2月下旬に定植の草丈が80（94）cmで7月中旬から出荷、7月下旬が最盛期であった。抑制裁培の5月6日播種、苗冷蔵した「なみだ」「モレットマリン」が7月下旬から定植。今年も昨年同様、苗が良好で、活着も良く本葉5枚程度（昨年8月6日調査）。

美浜町では、5月下旬に定植された「ロジーナ」シリーズ、「エクスカリバー」シリーズ等が、草丈は60~70cm（昨年60~70cm）と低めであったが、7月下旬から開花し、直売を中心に販売された。

若狭では5月中下旬に定植された「つくしの波」、「つくしの羽衣」、「エクローサホワイト」

等が草丈 60~70 cmで、8月上中旬に直売を中心に販売された。

## 6 その他

福井東部の切り花用ハボタンは、8月6日調査で「初紅」7月23日、「晴姿」が7月27日に定植され、「晴姿」が草丈5(5)cm、葉数5(3)枚、「初紅」10(7)cm、8(3)枚(昨年調査日7月31日)である。今年は昨年より3~4日遅く定植した。

福井北部の切り花用ハボタンは8月6日調査で、「初紅」7月18日に定植、草丈13(5)cm、葉数10(3)枚「晴姿」、「ウィンターチェリー」が7月27日にかけて定植され、草丈12(10)cm、葉数10(6)枚(昨年7月31日調査)である。病虫害では苗立枯病、ヨトウムシ類の発生が一部圃場でみられた。

## 対 策

### 1 秋植え夏ギクの定植準備と定植

#### (1) 苗づくりの管理日程

時 期	8/17	9/10	9/15	9/25	10月上
・かき挿し苗	台刈	_____	かき挿し	_____	苗とり・定植
・土寄せ苗	台刈	_____	土寄せ	_____	仮植 _____ 定植

特に本年は、高温で株が弱っているため、雨をめぐけて台刈りを行うか、雨後草勢が回復してから行う。草丈が低くスタントウイルスに罹っている可能性がある株や黒さび病に罹病している株は用いない。

#### (2) 苗床の病虫害防除の徹底

白さび病とアザミウマ類を中心に防除を徹底する。病気に弱い品種は特に罹病しないように注意する。近年は、黒さび病、トマト黄化えそ病の発生が多いので、株から病気をもちこさないよう注意し、ウイルスを媒介するアザミウマ類の防除を励行する。併せて周辺環境の除草を励行し、飛び込みを防止する。

病害：有機硫黄系剤（ステンレス剤、ジマンダイセン水和剤、エムダイファー水和剤）を週1回、予防的に散布する。

害虫：ミカンキイロアザミウマやミナミキイロアザミウマには、オンコル粒剤5やプリンスフロアブルを散布する。カブラヤガが産卵を行うときがあるので、適切な対策を行う。

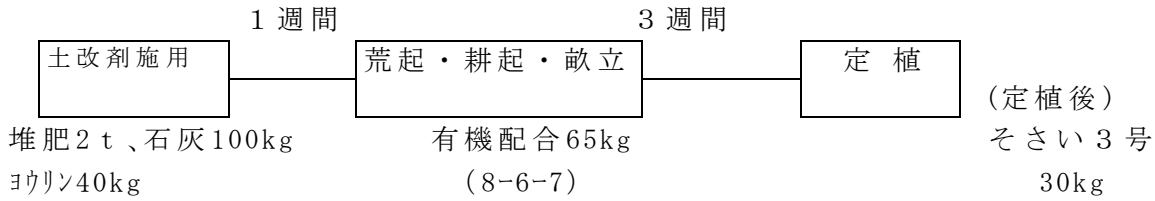
(3) かき挿し苗の場合、台刈2~3週間後の9月上中旬に、わき芽の長さが10cm程度になったかき挿し苗を、親株の付け根より掻き取って用いる。穂は、天幅1m程度、高さ15cm程度の畝をつくり、5×10cm程度の間隔で挿す。挿し芽後は十分に灌水する。1週間程度は、株の消耗を抑えるために寒冷紗などで30%程度遮光する。

(4) かき挿し苗を挿し芽して発根後に、有機配合肥料（窒素6%程度）を1㎡当り100g条間に施用するとともに、液肥1000倍を1週間に1回、2度程度施す。

(5) 土寄せ苗の場合、9月上中旬頃に土寄せする。充実した苗をとるために、畝10m当り有機配合（窒素成分6%程度）1kgとそさい5号200g程度を施す。

(6) 定植時期は春の芽立ちを良くするため、奥越地方で9月下旬~10月上旬、福井平坦部で10月上旬、若狭地方で10月中旬までに植え付けるよう定植準備を進める。輪作の間隔が短いとキクの生育が極端に低下するため、最低でも3年間は間隔をあけることが望ましい。

(7) 標準的作業過程と施肥量（10 a 当り資材量）



(8) 排水が悪いと越冬性が低下するので、排水の良い圃場を選定する。額縁排水など排水路の整備を行う。

(9) 標準的な畝幅は1.3mとするが、排水の悪い圃場や耕土の浅い所では狭めにとる。畝の高さを20cm以上確保する。畦成形後、速やかにかん水し、除草剤の前処理剤を散布しておけば、翌年まで抑草効果がある。

(10) 栽植密度は35cm条間の2条植えとし、株間は10cmを標準に芽立ちの悪い品種はこれより狭くし、芽立ちの良い品種は広くする。また、6月咲きや芽立ちの悪い品種は早めに定植する。

## 2 秋ギクの肥培管理と防除

肥効が落ち、葉色が淡くなり、葉の生育が悪くなっている場合は、マルチの条間部分を破り、雨水を入れることで、土壤中肥料の肥効を高める。また、1000倍に希釈した液肥を葉面散布するか、開花30日前後に速効性の化成肥料を少量施用する。ただし、白さび病、黒さび病の兆候がみられる場合は控える。また、8月中旬からオオタバコガの密度が増加するため、ローテーション防除を行い、被害の抑制を図る。

## 3 キクの主要病害虫防除

### (1) キクの白さび病

9月に入り気温が低下し、雨が多くなると、白さび病発生の好適条件となるので防除を徹底する。下葉に病斑がある場合は病葉を除去し、ラリー乳剤、チルト乳剤25、アンビルフロアブル、サブロール乳剤などの治療剤を葉裏にもかかるように散布する。ただし、感受性が低下した薬剤は散布しない。

(2) アブラムシ類は圃場の周辺（畝のはし）から侵入するので、初期の防除に努める。薬剤抵抗性の発生を避けるため、系統の異なる薬剤（例：オリオン水和剤40（カーバメート系）、アーデント水和剤（ピレスロイド系）、モスピラン水溶剤（ネオニコチノイド系）、ウララ50DF（新規）など）を交互に散布する。

(3) アザミウマ類も多くなるので、膜切れ4～5日前より薬剤散布を励行する。

## 4 キククロロティックモットルウイロイドについて

(1) 病気の特徴として、キク下葉に退色・緑黄斑症状が現れる。品種や他のウイルス、ウイロイドとの重複感染により症状が異なる。

(2) 伝染方法は、接触（汁液）伝染のみであるため、下葉かき、摘蕾などの管理作業は、感染が疑われる株を後回しとし、手袋を変えたり、はさみ等使用器具を火などで消毒したりしながら作業を進める。

(3) 台風やネット上げ時の葉擦れによっても感染拡大するため、疑わしい品種は基本的に導入しない。

(4) 感染株は圃場から除去し、他株に感染が拡大しないようにする。

## 5 スイセンの管理

- (1) 季咲スイセンでは、9月上中旬に雨量が少ないと開花期が遅れる傾向があるので、前年に葉先枯病の発生が少なく、用水が確保できる圃場では灌水する。夕方から夜間に灌水し、昼間は溝に停滞水がないようにする。
- (2) 促成栽培の遮光資材の取り外しは、気温25℃以下になった時点(9月15日頃)を目安とし、曇天の時に行う。
- (3) 促成栽培では9月下旬以降の灌水をやめ、根腐れ防止のため、溝さらえ等圃場排水を徹底する。
- (4) 球根養成圃場では、P K化成をa当たり5kg、マグフミン等の石灰資材を10kg施す。
- (5) イノシシの獣害が多くみられる地域では、電気柵等で対策する。
- (6) 台風対策をしっかりと行い、ハウス栽培では補強を行う。雪害にも備えるよう、支柱などを準備し、十分に補強しておく。

## 6 ストックの管理

- (1) コナガは育苗中から開花期にかけて常時発生し、葉裏から食害される。苗や生育初期に心葉が食害されると被害が大きく、生育が遅れ枯死することもある。抵抗性の発達しやすい虫であるので、薬剤散布後は効果を確認し、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。トアロー水和剤CT、コテツフロアブル、ノーマルト乳剤などが有効である。コナガコンなどの交信攪乱剤を用いる場合はできるだけ広域に設置する。
- (2) 気温が高い時期の育苗では、立枯れ性病害の予防対策としてオーソサイド水和剤80を散布する。立枯れ性病害が発生した場合は、被害株を抜き取り、病原菌を判別する。簡易な判別法では、苗立枯病(リゾクトニア菌)の発病株を引っ張ると、地際からちぎれるが、苗腐病(ピシウム菌)の場合は、地際部がこより状にくびれ、引っ張るとちぎれないで、根がついてくる傾向がある。生育がやや進むと、苗立枯病では地際部分から褐変し、表皮が脱落して、茎の髓部のみとなるが、苗腐病は根が褐変し、生育不良や萎凋する。
- (3) 本圃の定植前に立枯れ性病害の予防対策としてガスタード微粒剤20~30kg/10aで土壌消毒する。
- (4) 定植後の遮光の期間が長くなると、徒長するばかりでなく花芽分化が遅れ、開花が遅延する。したがって、遮光資材は活着後にできるだけ早く除去する。
- (5) 定植後1か月間は、1週間に1回の間隔で、液肥を積極的に施用し、活着と初期生育を促す。
- (6) ストックの中生や晩生品種では、ビビフルフロアブルの1000倍を、葉数10~14枚時と、その7~10日後に2回茎葉散布することで、開花が促進される。10a当たり1000を目安に散布する。
- (7) 9月下旬~10月上旬の花芽分化前後に高温に遭遇すると、花とびや心止まりが発生するため、10月中旬まで気温17℃を目安にサイドビニールを開放する。
- (8) 10月下旬から保温を開始するが、日中は必ず換気して温度較差を少なくする。
- (9) 発蕾までは草丈を確保するため、灌水を充分に行う。発蕾以降は徐々に灌水回数を減らし、開花期が近づいたらさらにひかえて切り花の品質向上を図る。

## 7 ハボタンの管理

- (1) 栽培中から開花期にかけてヨトウムシ類等が発生し、食害される。苗や生育初

期に成長点の芽が食害されると被害が大きく、生育が遅れ枯死することもある。抵抗性の発達しやすい虫であるので、薬剤散布後は効果を確認し、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。フェニックス顆粒水和剤、コテツフロアブル、ノーモルト乳剤などが有効である。

(2) 葉かき作業を順次行う。下葉かきを生育期間内に3~4回行い風通しを良くするとともに草丈を伸ばす。1度にするのではなく、順次ゆっくりしたほうが草丈は伸びる。

(3) 水管理

露地栽培では干ばつが続いたときやハウス栽培で土壌水分が十分でない場合は、灌水を行い、適切な水管理を行う。逆に、秋の長雨で圃場に停滞水がある場合は排水対策を行う。